

青年における境界例心性と母子イメージ及び 内的対象像との関連

上野山莉加・岡本祐子

Relationship among borderline personality traits, mother-and-child image, and internal object
in adolescence

Uenoyama Rika and Okamoto Yuko

Abstract: The current study examined the relationships between borderline personality traits, mother-and-child image and internal objects in adolescence. Questionnaires were distributed to 253 university students. In total, data from 227 participants were analyzed after excluding incomplete responses. The results revealed that, even among those who established stable mother-child relationships in early childhood and for whom “good subjects” were internalized, there was only a positive correlation with “concerns about disgust” or “connection desire”. In addition, there was a positive correlation between “bad subjects” as “relationship breaks” and “non-permanent objects” as “concerns about aversion,” “isolation”, and “connection desire”. These findings suggest that some young people desire to be hated and have connections with others. However, when characteristics such as breaking a relationship or feeling a vague sense of isolation are added, interpersonal relationships were found to be unstable, representing more borderline personality traits. In addition, we conducted interviews with 12 university students and examined how mother-child relationships in early childhood and internal objects influenced current borderline personality traits. The results revealed that, even for young participants with a stable mother-to-child relationship, youth-related characteristics and previous interpersonal relationships could affect borderline personality traits.

キーワード : adolescence, borderline personality traits, mother-and-child image, internal object

問題と目的

青年期では、親から心理的に自立することが重要な課題である。Blos (1967) は、青年期を、親から心理的に自立し、個を確立していく「第二の分離-個体化期」と述べた。乳幼児期に未解決の分離

-個体化を巡る葛藤が再燃し、内的依存対象からの支持を失いやすい時期であると考えられている。大学生になると、一人暮らしを始めるものも多く、両親からの物理的離別にとどまらず、自分の生まれ育った場所からの社会的、心理的離別も必要となる。新たな環境の中で青年たちは、第二の分離-個体化過程を、さまざまな内的体験として経験していると考えられる。

境界例とは

境界例が青年期以降に好発しやすい疾患であることはよく知られている。Materson (1979) は、青年期境界例概念を提唱し、青年期における分離-個体化のあり方、特に対人距離のとり方が問題となる再接近期のあり方に注目している。乳幼児期の分離-個体化過程の第3段階である再接近期において、母親が安全基地として機能しない場合、後年に至って、対人関係における「再接近期」的ジレンマのテーマを再燃させることが多い (Mahler, Pine & Bergman, 1981)。

精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM-5) (2014) によると、境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder: BPD) とは、対人関係、自己像、感情などの不安定性および著しい衝動性の広範な様式のことであると定義されている。具体的には、見捨てられることを避けようとするなりふりかまわない努力、不安定で激しい対人関係の様式、同一性の混乱、自己を傷つける可能性のある衝動性、自殺の行動、そぶり、脅し、または自傷行為の繰り返し、顕著な気分反応性による感情の不安定性、慢性的な空虚感、不適切で激しい怒り、または怒りの制御の困難といった9項目のうち5項目を満たす必要があるとされている。

境界例と青年期心性の類似点

このように境界例がパーソナリティ障害として把握される中で、境界例と青年期心性の類似点について、成田 (1987)、斎藤 (1990) は、自己同一性を巡る自己省察、自己拡散化、衝動統制の困難、行動化傾向、構造化された社会への抵抗といった観点から論じている。成田 (1987) は、両者の類似点として、移行的、中間的存在であること、幼児と大人を併存させていること、自己評価と他者評価が不安定でしばしば両極化することなどを挙げている。東山(1998)もまた、境界例の精神力動は青年期心性と関係していることを指摘しているが、その関連のために青年期危機の中に埋もれて境界例の症状が表面化しないことを懸念している。つまり、実際に境界例として現れている事例は一部に過ぎず、一般的な日常生活を送ることができている青年の中にも、境界例的な症状に悩まされている青年が存在することが考えられる。

このような境界例と青年期心性の類似点より、青年期においてみられる BPD 的な心的状態を境界例心性として捉える研究が多数報告されており、対人関係との関連を示した研究 (重松, 2005 ; 中西, 2010 ; 江上, 2011) や、両親をはじめとした家族との関連を示した研究 (古川・北山, 2004 ; 田村・井上, 2005 ; 大家, 2006 ; 江上, 2010 ; 松野・野末, 2015) などがある。これらの知見から、青年の境界例的な特徴への関心は低くないことが推察される。

境界例心性とは

安立 (1999) は、境界例心性について、「一般青年の境界例と類似した内的世界」と述べている。安立 (1999) 以降、着目される境界例心性には、臨床的な視点から捉える立場と、発達の視点から捉える立場があるとされている。江上 (2013) によると、臨床的視点では、境界例心性を「一般青年にみられるサブクリニカルなレベルの不安定な心理」と捉えられている。同様の視点で、古川・北山(2004)は、境界例心性を「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」と定義している。また、発達の視点では、境界例心性を「非臨床群の青年に一過的に体験される境界例に類似した心性」と捉えられている。田村・井上 (2005) は、青年期における自己像の有り様や他者との関係の両面において葛藤的になりやすい「危機的」で混乱した不安定な状態を境界例心性と位置付けており、本研究でも、この位置づけを採用する。

境界例心性と両親をはじめとする家族との関連

本邦では、古川・北山 (2004) をはじめとして、境界例心性と家族との関連を検討した研究がいくつかある。大家 (2006) において、境界例心性と親子イメージとの関連が検討されているが、父親と母親を分けずに親子関係を扱っており、依存的もしくは両価的葛藤をもつ親子関係イメージが父親と母親両方に共通するものなのか、父親あるいは母親どちらかの特徴であるのかは判断することができない。子どもの発達において、子どもとの愛着形成や分離-個体化など母親との関係が強く影響するものが多いことから、本研究は母親との関係に限定し、青年の母子イメージを扱うこととする。

境界例心性と内的対象像

境界例及び境界例心性は、対人関係の不安定さが問題となる。対人関係の不安定さは、幼児期は親、青年期は友人・恋人、成人期には配偶者など、発達段階ごとに、「重要他者」は入れ替わるものの、同じパターンの対人的問題を繰り返すことが多い。

対人関係の不安定さを考えるにあたって、精神分析的な治療理論では、こうした対人関係を対象関係 (Object Relations) という概念で扱っている。対象関係とは、「対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象 (他者) との関係性の表象」である。対象が目の前にいなくなっても相手が愛や慰めを与えてくれるというイメージを保てたり、対人場面で葛藤が生じても柔軟に内的対象の修正を行ったりすることが対人関係の安定につながる (馬場, 2002)。このような安定した内的対象像を確立するためには、幼児期の母子関係が重要となる。

井梅 (2011) は、幼児期、および現在の母親との関係性が対象関係に及ぼす影響について検討した。その結果、幼児期の安定的な母子関係は良好な対象関係に、拒否的およびアンビバレントな母子関係は、その逆の関連性がみられた。また重松 (2005) は、青年期における孤独感と境界例心性との関連および内的メカニズムを検討し、境界例心性が高いほど孤独感が高く、ひとりではいられず、不安定な「永続しない対象」や迫害的な「悪い対象」を想起しやすいことを示した。

以上のことから、幼児期の母子関係のあり方が、青年の境界例心性や青年の抱く内的対象像に影響することが考えられる。幼児期の母子関係はそのまま現在の対象関係に影響を及ぼすわけではなく、その後の関係性において絶えず修正されながら形づくられていくこと(井梅, 2011)から、現在の母子イメージも青年の内的対象像に影響していると考えられる。よって、本研究では、青年における境界例心性と幼児期及び現在の母子イメージと内的対象像に着目する。

目的

以上のことから、本研究では、以下の3点を目的とする。①青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を検討する(研究Ⅰ)、②母子画を用いて、母子イメージと境界例心性の高さにどのような関連があるかを検討する(研究Ⅱ)、③青年の母子関係や内的対象像がどのように現在の境界例心性の高さに影響するのかを質的に検討する(研究Ⅲ)。

研究Ⅰ

目的

青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を数量的に検討する。

仮説

- (1) 幼児期の拒否的あるいはアンビバレントな母子関係は、青年の内的対象像の中で、「悪い対象」「永続しない対象」を介して、青年期の境界例心性の高さに影響する。
- (2) 幼児期の安定的な母子関係は、青年の内的対象像の中で「良い対象」を介して、青年期の境界例心性の低さに影響する。
- (3) 就学前の母子関係が拒否的あるいはアンビバレントであっても、現在の母子関係が良好であれば、境界例心性は高くない。

方法

調査対象者 国立A大学の大学生146名、私立B大学の大学生107名の計253名に質問紙を配布、回収した。著しく欠損値のあるデータ16部、30歳以上のデータ10部を除外し、最終的な分析対象者は227名であり(男性63名、女性162名、不明3名)、有効回答率は89.7%であった。平均年齢は、19.9歳、 $SD = 1.5$ であった。

手続き 個別自記入形式の質問紙調査であり、授業後に筆者または代理人によって集合調査形式で実施された。回答依頼時に、調査への参加は自由であること、途中で中断することも可能であること、データは統計的に処理され個人が特定されることはないことを、文書と口頭での説明で合意を得た。回答はいずれも無記名で行われた。実施時間は約10分であった。

質問紙の構成 (1) 田村・井上(2005)による対人関係における境界例心性尺度、全22項目、4件法。「嫌悪に対する概念」、「孤立感」、「関係断絶」、「つながり希求」の4因子構造からなる。(2) 酒井(2001)による就学前の母子関係イメージ尺度、全16項目、6件法。「就学前の安定的な母子関係」、「就学前の拒否的な母子関係」、「就学前のアンビバレントな母子関係」の3因子構造からなる。

(3) 北村・無藤 (2001) による現在の母子イメージ尺度, 全 26 項目, 5 件法。「母親との親密性」, 「母親との過剰な依存・接触」の 2 因子構造からなる。(4) 重松 (2005) による内的対象尺度, 全 24 項目, 7 件法。「良い対象」, 「悪い対象」, 「永続しない対象」の 3 因子構造からなる。(5) フェイス項目 (所属, 年齢, 性別, 現在母親と同居か別居か)。

分析方法 HAD を用いて, 分析を行った。

結果

対人関係における境界例心性尺度の因子構造の検討 まず, 境界例心性尺度について, 先行研究と同様に 4 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。しかし, 欠損値が多く, 十分なパラメーターサイズではなかったため, 適合度を算出することができなかった。境界例心性尺度は, 得点が高いほど, 境界例心性の傾向が強くなるため, 平均値を代入してもそれぞれの調査対象者の傾向はそれほど変わらないと判断し, 欠損箇所それぞれにそれぞれの調査対象者の平均値を代入して, 再度確認的因子分析を行った。その結果, CFI = .877, RMSEA = .076 となり, 許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に, 第 1 因子を【嫌悪に対する懸念】因子, 第 2 因子を【孤立感】因子, 第 3 因子を【関係断絶】因子, 第 4 因子を【つながり希求】因子とした。クロンバックの α 係数は, 第 1 因子から順に, .83, .87, .73, .85, ω 係数は, 第 1 因子から順に, .84, .87, .73, .85 となり, 十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 1 に示した。

Table 1
対人関係における境界例心性尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
1. 【嫌悪に対する懸念】 (7項目), $\alpha=.83$, $\omega=.84$					
11. ちょっとしたしぐさからでも, 相手が自分を嫌っているかもしれないと思う。	.769	.000	.000	.000	.592
15. 相手が不機嫌だとその人から見捨てられたように思う。	.767	.000	.000	.000	.588
22. 相手が不機嫌だと, 自分が悪い気がする。	.705	.000	.000	.000	.498
17. 今は傍にいる人でもいつか自分から離れていくのではないかと感じる。	.691	.000	.000	.000	.477
1. 大切な人に対して, 相手が自分のことを嫌っていないか確かめずにはいられない。	.639	.000	.000	.000	.409
3. 好きな人や親しい人に対して, 批判したり違う意見を言ったりすると, いつでも自分が悪い気がする。	.472	.000	.000	.000	.223
14. 親しい人から何かを頼まれると, 自分には無理なことでもなかなか断れない。	.422	.000	.000	.000	.178
2. 【孤立感】 (4項目), $\alpha=.87$, $\omega=.87$					
18. とにかくひとりにはなりたくない。	.000	.845	.000	.000	.714
19. ひとりしていると, 心の中が空っぽな気がする。	.000	.818	.000	.000	.669
21. ひとりしていると, さみしさにうちのめされる気がする。	.000	.818	.000	.000	.669
10. ひとりしていると, 何も無い空間にとり残されたような気持ちになる。	.000	.710	.000	.000	.504
3. 【関係断絶】 (7項目), $\alpha=.73$, $\omega=.73$					
13. 私にとって, 人と長い親密に付き合い続けることは難しい。	.000	.000	.596	.000	.355
4. 自分のほうから人との関係を断ち切る (離れていく・別れる) ことが多い。	.000	.000	.596	.000	.355
7. 相手が不機嫌だと, その人のことを好きではいられない。	.000	.000	.579	.000	.335
5. 嫌になったらいつでも自分から離れられると思えるから人とつきあっていられる。	.000	.000	.531	.000	.282
8. 大切な相手から拒絶されるくらいならその前に自分から関係を断つ方がましだ。	.000	.000	.493	.000	.243
20. 完全に誰かに頼るか, まったく頼らないで一人でやっていくしかできない。	.000	.000	.453	.000	.205
2. 相手のことを親身になって考えてあげられるのは, その人が自分の目の前に存在しているときだけだ。	.000	.000	.438	.000	.192
4. 【つながり希求】 (4項目), $\alpha=.85$, $\omega=.85$					
12. 誰でもいいから誰か私の傍にいてほしい。	.000	.000	.000	.802	.643
9. 誰でもいいからいつも誰かとつながっていたい。	.000	.000	.000	.777	.604
6. 誰かと直接ふれあっていないと私は生きていけないんじゃないかと思う。	.000	.000	.000	.774	.598
16. 近くにいる誰かにいつも私のことを気にかけてほしい。	.000	.000	.000	.703	.494

境界例心性尺度得点の分類 境界例心性尺度得点の平均= 48 点, $SD = 11$ であった。平均から 11 点以上の者を高群 (59 点以上), 11 点以下の者を低群 (37 点以下) とした。その結果, 高群 44 名, 低群 41 名であった。

就学前の母子関係イメージ尺度の因子構造の検討 次に, 幼児期の母子関係イメージ尺度について, 先行研究と同様に 3 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。その結果, $CFI = .863$, $RMSEA = .082$ となり, 許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に, 第 1 因子を【就学前の安定的な母子関係】因子, 第 2 因子を【就学前の拒否的な母子関係】因子, 第 3 因子を【就学前のアンビバレントな母子関係】因子とした。クロンバックの α 係数は, 第 1 因子から順に, .82, .67, .70, ω 係数は, 第 1 因子から順に, .84, .69, .70 となり, 十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 2 に示した。

Table 2
就学前の母子関係イメージ尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【就学前の安定的な母子関係】 (6項目), $\alpha=.82$, $\omega=.84$				
10. 母親と遊ぶのが楽しかった。	.791	.000	.000	.626
7. 私は母親のそばで安心感があった。	.789	.000	.000	.622
13. 母親と出かけるのがうれしかった。	.743	.000	.000	.552
1. 私は母親を好きだった。	.737	.000	.000	.543
16. 私はよく母親に, ほめられた。	.575	.000	.000	.331
4. 私は母親が何をしても, それに関心がなかった。*	-.362	.000	.000	.131
2. 【就学前の拒否的な母子関係】 (5項目), $\alpha=.67$, $\omega=.69$				
8. 私が泣いていても, 母親は関心がなかった。	.000	.700	.000	.491
11. 助けて欲しいときに, 母親は助けてくれないことがあった。	.000	.680	.000	.462
14. 私は母親の愛情がうすいと思ったことがあった。	.000	.650	.000	.422
5. いつか見捨てられるのではないかと思った。	.000	.557	.000	.310
2. 私は同じことをしても怒られたり, 怒られなかったりした。	.000	.207	.000	.043
3. 【就学前のアンビバレントな母子関係】 (5項目), $\alpha=.70$, $\omega=.70$				
3. 母親が出かける時には, むりやりついて行こうとした。	.000	.000	.653	.427
6. 母親がそばにいないと, 夜眠れなかった。	.000	.000	.653	.427
12. 何かあれば, 母親はすぐに来てくれると思っていた。	.000	.000	.536	.287
9. 幼稚園(保育園)に行っても, 母親のことを思い出してずっと泣いていたことがあった。	.000	.000	.506	.256
15. 親戚の家に遊びに行っても, 親がいなくてこわかった。	.000	.000	.491	.241

*は逆転項目

現在の母子イメージ尺度の因子構造の検討 次に, 現在の母子イメージ尺度について, 先行研究と同様に 2 因子構造となることを確かめるため, 確認的因子分析を行った。その結果, $CFI = .666$, $RMSEA = .098$ となり, 適合度は不十分であった。ゆえに, 因子構造の検討のため, 最尤法及びプロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値が第 1 因子から順に, 5.989, 3.678, 1.914, 1.437, 1.300, 平行分析が第 1 因子から順に, 1.727, 1.598, 1.522, 1.446, 1.377 と推移していたため, 3 因子解が妥当であると判断した。そこで, 因子数を 3 に固定し, 再度因子分析を行った。因子負荷量が .35 以下となった項目 (7. 「私は自分のことよりも母親のことを優先する。」, 20. 「母親

に頼られたくない。)」を除外し、再度因子分析を行った。同様に、.35以下となった項目(14.「母親のことをあれこれ心配しすぎることはない。」、21.「母親のために自分を犠牲にすることはない。)」を除外し、再度因子分析を行った。第1因子は、先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりがみられたため、【母親との親密性】因子とした。第2因子は、先行研究で得られた結果とは異なっており、「母親に対して、穏やかな感情を持って接することができずに、ついイライラしてしまう。」「母親をうっとうしく感じる。」「理由もなく、母親に怒りを感じることもある。」など母親に対する嫌悪感や攻撃性が表れている項目の得点が低いことから、【母親に対する嫌悪感のなさ】因子と命名した。第3因子は、先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりがみられたため、【母親との過剰な依存・接触】因子とした。クロンバックの α 係数は、第1因子から順に、.85、.78、.77、 ω 係数は、第1因子から順に、.86、.80、.79となり、十分な内的整合性が得られた。因子分析の結果をTable 3に示した。

Table 3
現在の母子イメージ尺度の因子分析結果 (プロマックス回転・最尤法)

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【母親との親密性】(10項目), $\alpha=.85$, $\omega=.86$				
5. 母親は私のことを信頼してくれていると思う。	.849	-.083	-.089	.640
4. 非常に困ったときには、母親が話を聞いてくれると思う。	.825	-.210	.158	.614
1. 母親は私の感情を理解しようとしてくれていると思う。	.802	-.024	.022	.630
22. 母親がもっと自分のために時間を割いてくれても良いはずだと、母親に対して怒りを感じる。*	.532	-.019	-.206	.283
6. 母親は干渉しないが、いつも私のことを気にかけてくれる。	.501	.284	-.004	.479
23. 母親は私の期待を裏切ることが多い。*	.487	.229	-.122	.409
16. 母親は私に関心を示さない。*	.474	-.074	.007	.195
15. 自然に母親と温かい関係を保つことができる。	.441	.292	.200	.466
25. 母親のために何かしてあげることが、私にとって非常に重要なことである。	.378	.055	.279	.272
9. 母親との間には消しがたい壁がある。*	.370	.205	-.101	.262
2. 【母親に対する嫌悪感】(3項目), $\alpha=.78$, $\omega=.80$				
3. 母親に対して、穏やかな感情を持って接することができずに、ついイライラしてしまう。*	-.095	.804	-.006	.578
26. 母親をうっとうしく感じる。*	.109	.745	.087	.646
24. 理由もなく、母親に怒りを感じることもある。*	.333	.466	-.092	.499
3. 【母親との過剰な依存・接触】(9項目), $\alpha=.77$, $\omega=.79$				
18. 母親に反対されると自信がなくなる。	.046	.004	.717	.526
13. 母親に相談しないと自分のすげきことに自信を持ってない。	.116	-.096	.683	.515
19. 母親がいないと、私は何もできないだろう。	-.043	.017	.653	.417
11. 自分の思い通りに、母親がそばにいてくれないとイライラする。	-.169	.042	.500	.244
17. 母親から慰めを得られないと(母親が相談相手として頼りにならないと)腹を立てることがある。	-.038	-.277	.495	.362
2. 母親にあまりにも頼りすぎていると思う。	.094	.031	.467	.240
12. あれこれと母親の世話をせずにはいられない。	-.096	.043	.429	.175
8. 母親に守られていた子どもの頃に、もう一度戻ることができたらと思う。	-.195	.381	.418	.221
10. 母親が問題を抱えていることを知ると、自分の仕事に手がつかなくなる。	.068	.091	.402	.180

*は逆転項目

内的対象尺度の因子構造の検討 次に、内的対象尺度について、先行研究と同様に3因子構造となることを確かめるため、確認的因子分析を行った。その結果、CFI=.849、RMSEA=.083となり、許容できる範囲の適合度であった。先行研究と同様に、第1因子を【永続しない対象】因子、第2因子を【悪い対象】因子、第3因子を【良い対象】因子とした。クロンバックの α 係数は、第1因

子から順に、.90, .87, .74, ω 係数は、第1因子から順に、.90, .87, .74 となり、十分な内的整合性が得られた。確認的因子分析の結果を Table 4 に示した。

Table 4
内的対象尺度・確認的因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
1. 【永続しない対象】(10項目), $\alpha=.90$, $\omega=.90$				
10. 私一人が席を外すと、みんなが私の悪口を言っているような気がする。	.782	.000	.000	.611
23. 仲のよい人でも、次にどのような行動に出るのか予測がつかず不安だ。	.773	.000	.000	.597
17. 自分の意見を反対されると、その人は自分のことを悪く思っているような気がする。	.760	.000	.000	.578
16. 絶えず会っていないと、関係が切れてしまうような気がする。	.735	.000	.000	.541
11. しばらく連絡がないと、もうその人から嫌われてしまったのではないかと心配になる。	.725	.000	.000	.526
7. 今は親友であっても、この先けんかして別れることになるんじゃないかと心配になる。	.705	.000	.000	.497
1. 友人と久しぶりに会うとき、以前と同じように話ができるかどうか不安だ。	.683	.000	.000	.466
12. 手紙を出してもすぐに返事がこない、相手の気を悪くしたのではないかと心配になる。	.646	.000	.000	.417
2. 親しい人でも離れていると、その人が存在しているという確信がもてない。	.629	.000	.000	.396
22. 昔のことを考えると、いやな記憶ばかりよみがえる。	.534	.000	.000	.285
2. 【悪い対象】(8項目), $\alpha=.87$, $\omega=.87$				
20. 私は、親しい友人に対してもなんらかの疑いをもっている。	.000	.803	.000	.646
19. 人から優しくされても、つい疑ってしまう。	.000	.783	.000	.613
14. 仲のよい友人で会っても、私が成功すると心のどこかで妬むだろう。	.000	.776	.000	.602
21. ふと目があうと、その人が自分のことを快く思っていないように感じる。	.000	.708	.000	.501
13. 一緒にいるときと離れているときで、その人への態度が極端に変化してしまう。	.000	.665	.000	.442
15. 離れていると、その人のいやな面ばかり思い出してしまうことがある。	.000	.630	.000	.396
8. みんなと協力してなにかに取り組んでも、連帯感が湧かない。	.000	.514	.000	.264
4. 好きな人でさえ、憎くて憎くてしょうがないときがある。	.000	.497	.000	.247
3. 【良い対象】(6項目), $\alpha=.74$, $\omega=.74$				
18. 人からの自分に対する親切な言葉や行動は心のなかに刻み込まれている。	.000	.000	.731	.535
6. 落ち込んだとき、誰か自分の味方になってくれそうな人のことを思い浮かべる。	.000	.000	.623	.388
5. どんなときでも誰かが自分を見守ってくれているような機がする。	.000	.000	.603	.364
24. 自分の大切な人が亡くなっても、その人は心のなかに生き続けていると感じる。	.000	.000	.579	.335
9. なにか決断するときに、「あの人がいたらどうするだろう」と考えることがある。	.000	.000	.456	.208
3. 親友が本当に私のことを心配してくれたことを、これまで片時も忘れたことはない。	.000	.000	.417	.173

各尺度における下位因子の相関分析 境界例心性尺度、就学前の母子関係イメージ尺度、現在の母子イメージ尺度、内的対象尺度の下位因子ごとの相関係数を算出した (Table 5)。その結果、「良い対象」は「嫌悪に対する懸念」($p<.01$)、「孤立感」($p<.05$)、「つながり希求」($p<.01$) と正の関連があることが示された。これは先行研究と異なる結果であった。また、現在の母親イメージにおいて、「母親との過剰な依存・接触」は、境界例心性尺度のどの下位因子とも正の関連があることが示された (いずれも $p<.01$)。

Table 5
各尺度における下位因子の相関分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1. 嫌悪に対する懸念	—												
2. 孤立感	.57**	—											
3. 関係断絶	.44**	.19**	—										
4. つながり希求	.64**	.75**	.24**	—									
5. 安定的な母子関係	.04	.02	.05	.11	—								
6. 拒否的な母子関係	.24**	.17*	.18**	.16*	-.36**	—							
7. アンビバレントな母子関係	.24**	.13*	.12+	.21**	.48**	.05	—						
8. 母親との親密性	.02	-.04	-.09	.02	.64**	-.49**	.27**	—					
9. 母親に対する嫌悪感のなさ	-.08	-.04	-.21**	-.11	.32**	-.28**	.13*	.57**	—				
10. 母親との過剰な依存・接触	.36**	.24**	.31**	.28**	.32**	.13+	.48**	.13*	-.05	—			
11. 永続しない対象	.72**	.49**	.40**	.50**	-.04	.38**	.26**	-.19**	-.21**	.46**	—		
12. 悪い対象	.51**	.32**	.54**	.33**	-.02	.33**	.16*	-.19**	-.28**	.35**	.79**	—	
13. 良い対象	.35**	.17*	.07	.32**	.35**	.00	.29**	.32**	.11+	.29**	.23**	.12+	—

**p<.01, *p<.05, +p<.10

性差の検討 性差の検定を行うために、境界例心性尺度について t 検定を行った。その結果、有意差は認められなかった ($t = .64, df = 222, n.s.$)。

幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性得点の関連 仮説 (1), (2) を検討するために、幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性得点において、SEM を行い、パス図を作成した (Figure 1)。この時、幼児期の母子関係と内的対象像の下位因子間に共分散を仮定した。CFI = .993, RMSEA = .051 となり、適合度は十分であった。幼児期の「拒否的な母子関係」、「アンビバレントな母子関係」は、「永続しない対象」を介して、境界例心性の高さと正の関連がみられたが、「悪い対象」と境界例心性の高さに関連はみられなかった。また、幼児期の「安定的な母子関係」は、「良い対象」を介して、境界例心性の高さと正の関連がみられた。以上から、仮説は一部支持された。

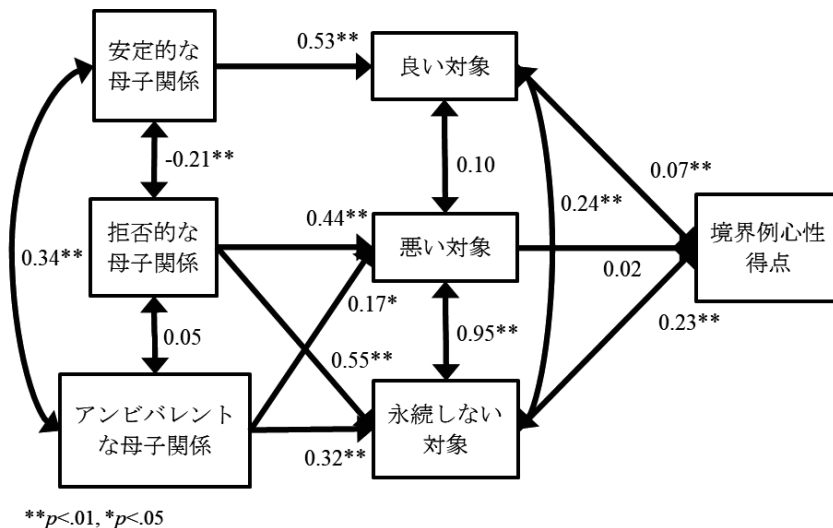


Figure 1. 幼児期の母子関係、内的対象像、境界例心性尺度との関連

幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子との関連 次に，境界例心性尺度の下位因子ごとに SEM を行い，パス図を作成した (Figure 2)。この時，幼児期の母子関係と内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子間に共分散を仮定した。CFI=1.000，RMSEA=.000 となり，適合度は十分であった。幼児期の「安定的な母子関係」は，「良い対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」と「つながり希求」と正の関連があることが示され，仮説と異なる結果となった。また，幼児期の「拒否的な母子関係」，「アンビバレントな母子関係」は，「永続しない対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」，「孤立感」，「つながり希求」と正の関連がみられた。一方で，「関係断絶」とは関連がみられなかった。また，幼児期の「拒否的な母子関係」，「アンビバレントな母子関係」は，「悪い対象」を介して，「嫌悪に対する懸念」と負の関連，「孤立感」と負の有意傾向，「関係断絶」と正の関連がみられた。一方で，「つながり希求」とは関連がみられなかった。

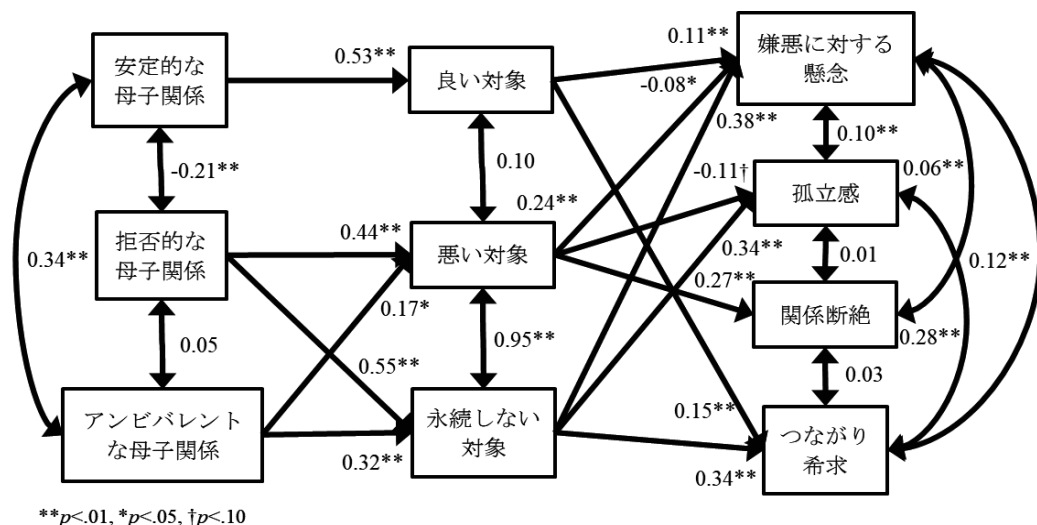


Figure 2. 幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度の各下位因子との関連

幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性得点の関連 仮説 (3) を検討するために，幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性得点において，SEM を行い，パス図を作成した。CFI=.772，RMSEA=.238 となり，適合度は十分ではなかった。そのため，幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性尺度の下位因子ごとに SEM を行い，パス図を作成した (Figure 3)。この時，境界例心性尺度の各下位因子間に共分散を仮定した。CFI=.947，RMSEA=.117 となり，許容できる範囲の適合度であった。幼児期の「拒否的な母子関係」は，現在の「母親との親密性」と負の関連があるが，「母親との親密性」を介して，境界例心性尺度の各下位因子との関連はみられなかった。また，幼児期の「アンビバレントな母子関係」は，現在の「母親との親密性」と正の関連があるが，「母親との親密性」を介して，境界例心性尺度の各下位因子との関連はみられなかった。

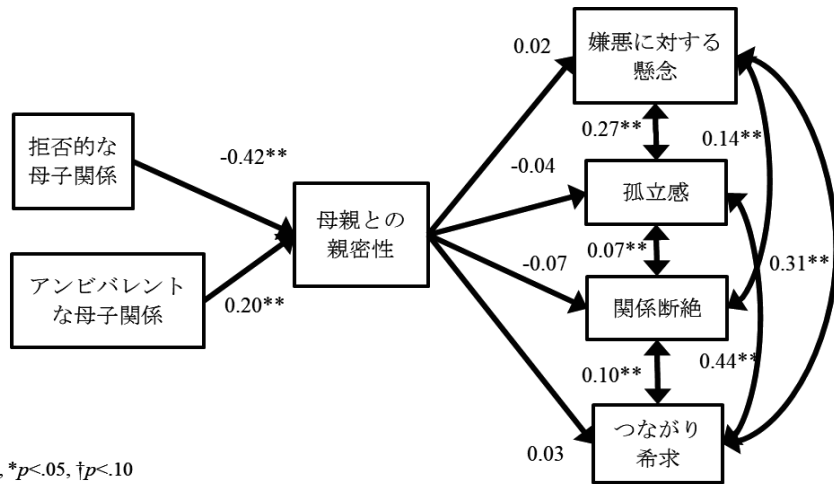


Figure 3. 幼児期の母子関係，現在の母子関係，境界例心性尺度の各下位因子との関連

考察

研究Iの目的は，青年における境界例心性と母子イメージ及び内的対象像との関連を数量的に検討することであった。

各尺度における下位因子の相関分析 境界例心性尺度，就学前の母子関係イメージ尺度，現在の母子イメージ尺度，内的対象尺度の下位因子ごとの相関係数を算出したところ，「良い対象」は「嫌悪に対する懸念」($p < .01$)，「孤立感」($p < .05$)，「つながり希求」($p < .01$)と正の関連があることが示された。これは先行研究(重松, 2005)と異なる結果であった。これらのことから，「良い対象」が内在化している者でも，対人関係において，嫌われることに対する不安や孤立感，人とのつながり欲求をある程度は感じており，青年期心性として理解することができると考えられる。

また，現在の母親イメージにおいて，「母親との過剰な依存・接触」は，境界例心性尺度のどの下位因子とも正の関連があることが示された(いずれも $p < .01$)。このことから，幼児期の母子関係だけでなく，現在の母子関係，特に母子ともに心理的に密着している関係も青年の境界例心性の高さに影響を及ぼすことが考えられる。

性差の検討 境界例心性尺度得点に性差はみられず，先行研究と異なる結果を示した。しかし，古川・北山(2004)や大家(2006)，江上(2010)など非臨床群を対象とした研究では，いずれも性差がみられなかった。境界例心性は青年期における一過性の事象であるが，発達の中で，病理水準が重くなり，将来的に境界例を発症する可能性が高くなるのが女子であると考えられる。よって，非臨床群では性差がみられなかったと推察される。

幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性との関連 仮説(1)は，幼児期の母子関係，内的対象像，境界例心性尺度全体をみると支持された。しかし，境界例心性尺度の下位因子ごとにパス図を作成すると，「永続しない対象」は，「嫌悪に対する懸念」，「孤立感」，「つながり希求」と正の関連がみられたが，「関係断絶」とは関連がみられなかった。また，「悪い対象」は，「嫌悪に対する懸

念」と負の関連、「孤立感」と負の有意傾向、「関係断絶」と正の関連がみられたが、「つながり希求」とは関連がみられなかった。永続しない内的対象像をもつ者は、孤立感を感じ、人とのつながり欲求を持ちながらも、嫌われることへの不安を抱いており、親しくなりたいが、相手にありのままをさらけ出すと嫌われてしまうかも知れないという葛藤状態にある。また、悪い内的対象像をもつ者は、嫌われる不安を抱く前に、自分から関係を断つといった特徴を持つ。仮説 (2) において、幼児期の「安定的な母子関係」は、「良い対象」を介して、「嫌悪に対する懸念」、「つながり希求」と正の関連がみられた。これは先行研究と異なる結果であり、仮説を支持しなかった。このことについて、一般青年の青年期心性として「嫌悪に対する懸念」、「つながり希求」が特徴としてあげられる。人とつながりたいが、嫌われることが恐いという考えは、対人関係、特に親密な関係の形成において、誰しもが感じるものである。よって、「安定的な母子関係」が内在化している者でも、親以外の親密な他者との関わりで、「嫌悪に対する懸念」や「つながり希求」を抱くことが考えられる。

以上のことから、それぞれの内的対象像によって、境界例心性の状態像が異なる可能性が示唆された。重松 (2005) は、境界例心性と「永続しない対象」、「悪い対象」との関連を述べ、境界例心性の特徴を有する青年の内的対象像は、「悪い対象」、「永続しない対象」であることを示した。本研究では、「悪い対象」、「永続しない対象」のパスを見ると、境界例心性尺度のすべての下位因子と関連がみられたことから、「嫌悪に対する懸念」、「孤立感」、「関係断絶」、「つながり希求」の4つの因子を持ち合わせていること、すべてを包括することによって、境界例心性につながるものが考えられる。「良い対象」と境界例心性尺度の「嫌悪に対する懸念」と「つながり希求」に正の関連がみられたが、これらは青年期心性として捉えることができ、「孤立感」、「関係断絶」の有無で、境界例心性か青年期心性かを区別できると考えられる。

幼児期の母子関係、現在の母子関係、境界例心性との関連 仮説 (3) は、支持されなかった。これは、現在の母親との関係性だけが境界例心性の高さに影響する可能性は低いこと、つまり、青年期は親から心理的に自立する時期であり、親よりも友人や恋人との関係性の影響が強いことによると考えられる。現在の母親との関係性が直接境界例心性の高さと関連があるとはいえない。母親との関係性だけでなく、友人や恋人など他の対人関係も考慮し、境界例心性の高さと関連を検討する必要があると考えられる。

研究II

問題

心理アセスメントや心理療法の場面において用いられる投影法の1つとして、母子画 (Mother and Child Drawings) が挙げられる。これは、Gillespie (1994) が考案した対象関係論を理論背景とする描画法であり、「お母さんと子どもを描いて下さい」という教示の下で実施される。

Gillespie (1994) は、母子画によって対象関係のなかの自己や早期の母子関係について知ることができ、さらに母子分離のレベルを測ることもできるとしている。また、母子画には描いた人の自己認知や他者の受け止め方、他者との関係様式が反映されると考え、自己の体験と重要な人物との関係を通しての体験の両方についてのメッセージを伝えるものとして検討できるとしている。

馬場 (2005) は、母子画を精神力動的な心理療法を前提にした心理アセスメントの手段として大いに期待できる技法であるとし、日本で最初に母子画の基礎的研究を行った。馬場 (2005) は、集めた母子画を分析した結果、母子画の基本的パターンとして、①母親像と子ども像が正面を向いて手をつないでいる絵、②母子像の表情はともに笑顔である絵という 2 つが見出された。

目的

母子画を用いて無意識に表れる母子イメージと境界例心性の高さの関連を検討する。

仮説

馬場 (2005) を参考に、境界例心性が高い対象者の描く母子画の特徴として、描かれる人物像が後ろ姿、または手をつなぐなどの身体接触がないこと、母子像の表情に笑顔がみられないことが考えられる。

方法

調査対象者 研究Iの質問紙で、研究IIへの協力を承諾した大学生 13 名 (男性 5 名、女性 8 名) であった。平均年齢 20.1 歳、 $SD=0.5$ 、境界例心性得点の平均は 54 点であった。

調査材料 A4 のケント紙 1 枚。2B の鉛筆。消しゴム。調査同意書。質問表。

手続き 最大 4 名の集合調査にて、馬場 (2005) の手続きに倣い、母子画を実施した。調査同意書に署名後、「お母さんと子どもの絵を描いて下さい」と教示し、自由に描いてもらった。描画終了後に、質問表を配布し、「親子は何をしているところですか?」、「子どもは何を考えていますか?」、「母親は何を考えていますか?」、「絵を描いてみての感想を教えてください」という質問に回答を依頼した。

結果

それぞれの対象者のプロフィールと母子画の特徴を Table 6 に示した。なお、研究IIIのプロフィールと対象者の ID は一致している。

Table 6
調査対象者のプロフィールと母子画の特徴

ID	年齢	性別	境界例心性得点	母子画の特徴				備考
				形態	サイズ	表情	身体接触	
A	20	男性	49	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	なし	
B	20	女性	51	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
C	20	女性	61	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	境界例心性高群
D	20	男性	56	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
E	20	女性	52	母正面, 子横	全身	母子共に非笑顔	なし	
F	20	女性	54	母子共に正面	顔のみ	母子共に笑顔	なし	
G	21	男性	32	母子共に後ろ姿	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性低群
H	19	女性	55	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
I	20	男性	59	母子共に後ろ姿	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性高群
J	21	男性	67	母子共に正面	半身	母子共に笑顔	なし	境界例心性高群
K	20	女性	74	母子共に正面	全身	母子共に非笑顔	あり	境界例心性高群
L	20	女性	48	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	
M	20	女性	42	母子共に正面	全身	母子共に笑顔	あり	

Table 6 より、境界例心性高群の母子画の特徴として、「母子共に正面」、「後ろ姿」、「母子共に笑顔」、「非笑顔」、「身体接触あり」、「身体接触なし」がみられた。また、境界例心性低群の母子画に、「母子共に後ろ姿」、「母子共に非笑顔」がみられた。よって、仮説は支持されなかった。また、対象者数が少ないこともあり、境界例心性の高さと関連する母子画の特徴を述べることは困難であった。

考察

対象者が少なかったことから、境界例心性の高さと母子画の特徴を述べることは難しく、仮説は支持されない結果となった。境界例心性の高低に関わらず、母子が共に笑顔のあたたかい関わりの絵を描く者が多かった。このことから、調査対象者は非臨床群であり、基本的には安定した母子関係を有していたことが推察される。

研究III

目的

青年の母子関係や内的対象像がどのように現在の境界例心性の高さに影響するのかを質的に検討する。なお、青年期は母子関係だけではなくその他の対人関係も重要となってくるため、幅広い対人関係に着目して、境界例心性の高さに至るまでのプロセスを具体的に検討することを目的とする。

方法

調査対象者 研究IIの調査で、研究IIIへの協力を承諾した大学生 12 名 (男性 5 名、女性 7 名) であった。平均年齢 20.1 歳、境界例心性得点の平均 55 点であり、境界例心性高群が 4 名 (男性 2 名、女性 2 名)、境界例心性得点が平均 (研究Iの平均 48 点) 以上の対象者が 7 名 (男性 2 名、女性 5 名)、境界例心性低群が 1 名 (男性 1 名) であった。調査対象者のプロフィールを Table 7 に示した。

Table 7
面接調査対象者のプロフィール

ID	年齢	性別	親と同居/別居	境界例心性得点	備考
A	20	男性	別居	49	
B	20	女性	別居	51	
C	20	女性	別居	61	境界例心性高群
D	20	男性	別居	56	
E	20	女性	別居	52	
F	20	女性	別居	54	
G	21	男性	別居	32	境界例心性低群
H	19	女性	別居	55	
I	20	男性	別居	59	境界例心性高群
J	21	男性	別居	67	境界例心性高群
K	20	女性	別居	74	境界例心性高群
L	20	女性	同居	48	

手続き プライバシーに配慮した部屋で、個別に半構造化面接を行った。面接は1時間30分を要し、内容はすべて対象者の承諾を得て録音し、後日、逐語記録を作成した。

倫理的配慮 協力者の権利（面接調査への参加は自由であること、いつでも面接の中止を求めることができること等）、プライバシー保護について文書・口頭で説明し、承諾を得た。また、その上で面接結果を公表することの許可を得た。

面接内容 面接項目を Table 8 に示した。

Table 8
面接項目

①家族構成	家族の年齢，同居か別居か，出身地，帰省頻度
②母親との早期記憶	何才の時の記憶か，場所，周りの情景，その時の気持ち
③母子画について	実体験の場合→何才の時か，この時の気持ち，場面を選んだ理由 実体験でない場合→実体験を描かなかった理由，実体験を描くとしたらどんな場面を描くか
④幼児期の母子イメージ	母子イメージが変化することはあったか，変化の時期，理由
⑤現在一番親しい人について	関係性，親しくなり始めた時期，ありのままをさらけ出しているか，その人からの評価は気になるか，一緒にいるとどんな気持ちになるか，関わりの中での印象的なエピソード，その人に抱くイメージ
⑥これまでの対人関係について	幼児期，児童期，思春期，青年期の人に抱くイメージ，イメージが変化した時期，理由 どんな風にイメージが変わったか，その時の気持ち

分析方法 本研究は、ある程度の安定的な母子関係が基盤としてあるものの、現在の境界例心性の高さに影響する出来事や内的対象像の変容プロセスを分析することがねらいであるため、TEM (Trajectory Equifinality Model : 複数経路・等至点モデル) を採用した。安田・サトウ (2012) を参考に、以下の手順で分析を実施した。まず、①逐語録を作成し、幼児期の母子関係、現在の母子関係、これまでの対人関係、現在親密感のある人との関係についての語りをそれぞれ抽出し、意味のまとまりごとに切片化した。切片化された語りに見出しをつけ、対象者ごとに時間経過に沿って並べた。対象者間で類似した見出しをまとめ、カテゴリーを生成し、TEM 図を作成した。

結果

カテゴリー分類 カテゴリーの詳細については Table 9 に示した。なお Table 9 に示されたカテゴリーの具体的な逐語データについては、実際のデータを個人が特定されないように意味内容に注意を払いながら若干の加工を加えているものも含まれる。以下にカテゴリー分類から導き出された幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセス (Figure 4) について具体的に説明をする (以下 TEM の概念に関連するものを【】、コアカテゴリーを《》、サブカテゴリーを<>で示した)。

Table 9

TEM図のカテゴリーとカテゴリーの具体的な逐語記録

TEMの概念に関するもの	コアカテゴリー	サブカテゴリー	逐語記録	該当する対象者
早期記憶	positive		・幼稚園の送り迎え(A, J, L) ・母親との散歩(I)	A, I, J, L
	neutral		・母親と出かけた(B, H, K) ・母親と一緒に何かした(E, F)	B, E, F, H, K
	negative		・母親に怒られた(D)	D
幼児期の母子イメージ	positive/negative		・怖いけど、優しかった(D, J) ・厳しいけど、安心できる(C, F, H)	B, C, D, E, F, H, J, K
	positive		・あたたかい関係、安心できる(A, L) ・自分のことを分かってくれる(I)	A, I, L
対人関係上の出来事(P)	家族との関わり	悩み相談	・つらい気持ちを話す(F)	A, F, I, J, L
		自分を受け入れてくれる	・自分のことを分かってくれる(I)	A, I
		自分のことを思ってくれる	・自分のことが大事だった(H)	E, F, H
対人関係上の出来事(N)	家族との関わり	関係希薄	・共働きであり会う機会がない(D)	D
		気を遣う	・Moを心配させたくない(B) ・Moの忙しい様子を見て(I)	B, F, I
		機嫌をうかがう	・こういうことしたら怒るなかダメだ なって思う(C)	C, J
	友達との関わり	いじめ	・悪口を言われる(A), ・仲間外れ(K)	A, K
		トラブル	・関係性不良(E, H)	E, H, L
他者評価懸念			・こう言ったら嫌われる(A, C, I) ・こう言ったら傷つく(B, L) ・人の目や反応を気にする(J, L)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K
対人関係上の ストレスフルな 出来事			・小学校時代(A, B, C, J, K, L) ・中学校時代(F, I) ・高校時代以降(E, H)	A, B, C, E, F, H, I, J, K, L
希薄な対人関係	1人を好む		・関わりたくない, 1人が楽(B, K) ・どうせ私とは仲良くしたくない(F, H)	B, C, E, F, H, K
	広く浅く		・適当に仲良くする(A, L) ・荒波を立てたくない, 表面的(D, I)	A, D, I, J, L
学校での居場所感			・この人と行動していれば大丈夫(I) ・とりあえず一緒に過ごせる人を探す(L)	I, L
家族のサポート			・Moの支え(A, B) ・悩みを相談する(F, I, J, L, K)	A, B, F, I, J, K, L
家族との物理的距離			・今の距離感がちょうどよい(C, E, H)	C, E, H
母親のnegativeイメージの 改善			・1人の人間, 対等(C, F, J) ・自分のためだった(H, K)	B, C, E, F, H, J, K
親以外の依存対象の形成	良いイメージ	安心感	・安心する(A, C, D, H, K, L)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
		信頼感	・信頼できる(D, J)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
	悪いイメージ	見捨てられ不安	・離れていくのが怖い(C, F, J)	A, B, C, D, E, F, H, I, J, K, L
		嫌われることへの不安	・嫌われたらどうしよう(B, C, D, I, J)	F, H, I, J, K, L

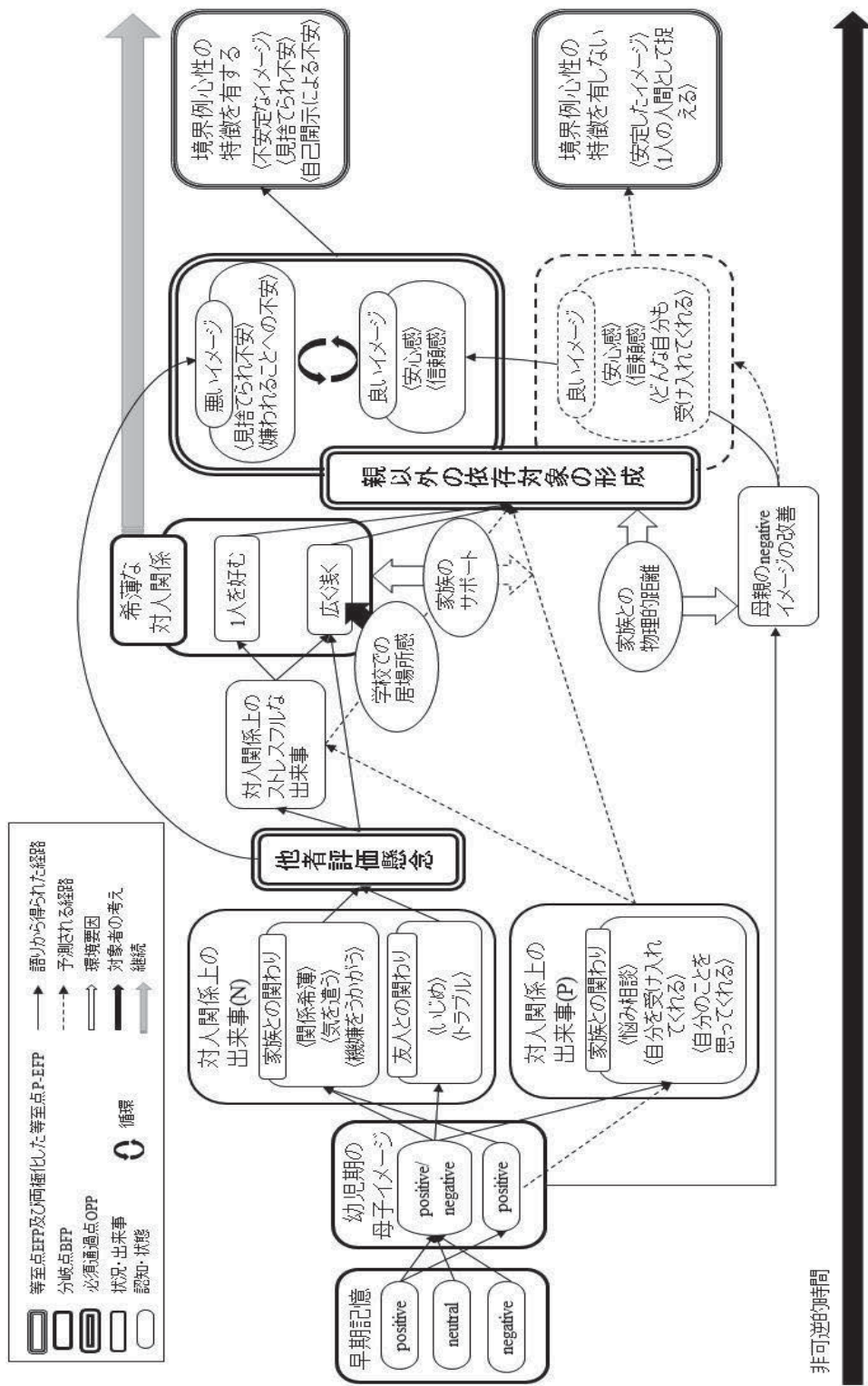


Figure4. 幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセス図

TEM 図に関する全体的な説明 まず、TEM の概念と本研究における意味を Table 10 に示した。

Table 10
TEM概念と本研究における意味

TEM概念	本研究における意味
等至点：EFP (Equifinality Point)	境界例心性の特徴を有する
両極化した等至点：P-EFP (Polarized Equifinality Point)	境界例心性の特徴を有しない
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	① 早期記憶 ② 幼児期の母子イメージ ③ 対人関係上の出来事 ④ 希薄な対人関係
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	① 他者評価懸念 ② 親以外の依存対象の形成

Figure 4 は、非可逆的な時間の中で、幼児期の母子イメージ及び内的対象像が、その後の対人関係を経て、現在の境界例心性の特徴を有するに至るのかを表したプロセスを述べる。

まず、EFP である【境界例心性の特徴を有する】に至るまでのプロセスを説明する。母親との【早期記憶】が<positive>、<neutral>、<negative>に分かれ、<positive>な【早期記憶】は、<positive>、<positive/negative>な【幼児期の母子イメージ】に、<neutral>、<negative>な【早期記憶】は、<positive/negative>な【幼児期の母子イメージ】につながる。幼児期、児童期の《家族との関わり》は、ポジティブな経験もあるが、ネガティブな経験もある。家族や友人とのネガティブな出来事を経験することによって、他者との関係において【他者評価懸念】を抱くことにつながる。【他者評価懸念】を抱くことに加え、その後の対人関係上のストレスフルな出来事を経験することによって、《1人を好む》、《広く浅く》といった【希薄な対人関係】の形成に至る。この時、《広く浅く》の友人関係を築く心理的要因として【学校での居場所感】が大きく影響している。しかし、学校で【希薄な対人関係】であっても、家庭で居場所を感じるなど【家族のサポート】が重要となってくる。大学入学を機に下宿を始め、【家族との物理的距離】ができたことによって、幼児期に抱いていた母親に対するネガティブイメージが改善される。また、親からの物理的・心理的自立に伴って、【親以外の依存対象の形成】を行う。この時、家族以外の依存対象を形成するといった点で、児童期から抱き始めた【他者評価懸念】が顕著になり、《悪いイメージ》が現れる。しかし、比較的安定した母子関係で育ており、良い対象が内在化しているため、《良いイメージ》も持つことができている。よって、《良いイメージ》、《悪いイメージ》が循環しており、イメージが不安定なことから、【境界例心性の特徴を有する】に至る。

次に、P-EFP である【境界例心性の特徴を有しない】に至るまでのプロセスを説明する。母親と

の【早期記憶】が<positive>かつ、【幼児期の母子イメージ】も<positive>である。対人関係上の出来事、特に《家族との関わり》で、ポジティブな経験が積み重ねられ、【他者評価懸念】を抱かない。その後、【対人関係上のストレスフルな出来事】を経験したとしても、【家族のサポート】を受けたり、当事者が肯定的な意味づけを行ったりすることによって、人に対する全般的なイメージが変化することがなく、新たな依存対象を見つける。幼児期、児童期と良い対象が内在化されており、親以外の新たな依存対象に対しても、安定した<良いイメージ>を抱き、【境界例心性の特徴を有しない】に至る。

早期記憶 まず、対象者の語りから【早期記憶】を《positive》、《neutral》、《negative》に分類し、第一のBFPとした。【早期記憶】が《positive》とは、母親との記憶が“よく遊びにつれて行ってくれた”、“泣いている時に慰めてくれた”など情緒的な関わりを基に分類した。【早期記憶】が《neutral》とは、母親との関わりでの記憶であるが、語りの中で“嬉しかった”、“楽しかった”などの感情がみられなかったものを分類した。【早期記憶】が《negative》とは、“怒られた”など負の感情しか語られなかったものを分類した。

幼児期の母子イメージ 次に、【幼児期の母子イメージ】を、《positive/negative》、《positive》に分類し、第二のBFPとした。【幼児期の母子イメージ】が<positive/negative>とは、“怖かったけど、安心できる存在”、“優しくあったけど厳しい面もあった”など、基盤としてあたたかい関わりがあるが、怒られること、厳しくされることに対して、当時は納得のいかなさや恐怖感を抱いていたなど、2局面を持ち合わせる語りを基に分類していた。【幼児期の母子イメージ】が《positive》とは、“あたたかい”、“なんでも分かってくれる”といった語りを基に分類した。

対人関係上の出来事 次に、【対人関係上の出来事】を【対人関係上の出来事 (N)】と【対人関係上の出来事 (P)】に分類し、第三のBFPとし、どのような出来事を経て、【他者評価懸念】につながるかを示した。【対人関係上の出来事 (N)】と【対人関係上の出来事 (P)】は、同じ対象者の中に複数存在する経験であることから、上下に並べた。【対人関係上の出来事 (N)】は、《家族との関わり》、《友人との関わり》に分類した。まず、《家族との関わり》については、家族との関わりの中で、<関係希薄>さがうかがえたり、“母親を心配させたくない”、“こんなこと言ったら迷惑かも”など<気を遣う>こと“母親の機嫌をうかがいながら行動する”、“こういうことをしたら怒るかも”など<機嫌をうかがう>ことが【他者評価懸念】につながっていた。また、《友人との関わり》については、友人からの<トラブル>や、クラスでの<いじめ>の経験が【他者評価懸念】につながっていた。これらのような対人関係上の出来事を経験することで、“こういうことを言ったら嫌われてしまうかも”、“関係にひびを入れたくない”と、多くの対象者が他者にどう思われるかなどの評価を気にし、自己開示や自分のありのままをさらけ出すことに消極的になる様子がみられた。一方で、【対人関係上の出来事 (P)】は、《家族との関わり》のエピソードのみ語り得られた。《家族との関わり》のポジティブなエピソードとして、自分が困っている時、悩んでいる時に<悩み相談>をした、<自分のことを受け入れてくれる>、<自分のことを思ってくれる>といった経験をしたといった母親との関わりが多く語られた。

他者評価懸念 【他者評価懸念】は、OPPである。全ての対象者が児童期に、家族や友人との関

わりの中で、ネガティブな出来事を経験しており、そのネガティブな経験が“人にどう思われるか気になる”、“相手の顔をうかがって行動する”などの【他者評価懸念】につながっている。《友人との関わり》はくいじめ、＜トラブル＞などネガティブな経験がほとんどであったが、《家族との関わり》、特に母親との関わりであるが、母親との関わりは、母親の様子を見てく気を遣う＞など、ネガティブな経験とは言いにくい経験もみられた。児童期の出来事によって形成された【他者評価懸念】が、親からの物理的・心理的自立に伴って、親以外の依存対象に抱く《悪いイメージ》につながっている。

対人関係上のストレスフルな経験 【対人関係上のストレスフルな経験】とは、上述した【対人関係上の出来事】とは別である。多くの対象者が【他者評価懸念】を抱いたあとに、いじめなどの友人関係においてネガティブな出来事を経験していた。

希薄な対人関係 次に、【希薄な対人関係】を《広く浅く》、《1人を好む》に分類し、第四のBFPとした。対象者の中には、【他者評価懸念】を抱いてから、【希薄な対人関係】に至るものと、【他者評価懸念】を抱いた上で、さらに《対人関係上のストレスフルな経験》をし、【希薄な対人関係】に至るものがいた。まず、《広く浅く》とは、他者から嫌われることを恐れ、“荒波を立てない”ような関係を築いたり、“特定の友人を作らない”などその場限りの人間関係を築いたりすることである。自分の悩みごとを話すことはできず、“親友って呼べる人はいない”などの語りもみられた。次に、＜1人好む＞とは、対人関係において、自分が傷ついたり、相手を傷つけたりすることを避けるために、消極的な人間関係をあらわしている。【希薄な対人関係】は、その後【親以外の依存対象の形成】に至っても、親密な関係性の人以外とは“当たり障りのない”、“荒波を立てない”関係は継続していたため、グラデーション矢印で継続を示した。

学校での居場所感 《広く浅く》の対人関係には、学校生活で1人になることへの恐れから、“一緒にいるだけ”、“この人といれば大丈夫(1人にならない)”など、【学校での居場所感】を重視する語りもみられた。

家族のサポート 【親以外の依存対象の形成】に至るまでに、学校での友人関係について相談する家族の存在が大きいことが、多くの対象者の語りでみられた。学校での対人関係がうまくいかなかった、家族が拠り所として機能している者が多かった。

家族との物理的距離 大学入学を機に下宿を始め、家族と物理的距離ができたことにより、“今の距離感がちょうどいい”と母親のnegativeイメージ改善につながる語りが多かったため、【母親のnegativeイメージ改善】と矢印をつないだ。

母親のnegativeイメージの改善 大学入学を機に【家族との物理的距離】ができたことにより、幼児期の母親との関わりを振り返り、当時の母親の厳しさを“今思うと自分のためだった”、と肯定的に意味づけしたり、“母親も人間なんだなと思った”など母親を1人の人間として捉え直し、現在良好な母子関係を築いている者が多かった。基盤として母親にpositiveなイメージを持っていること、幼児期の母親のnegativeイメージが改善したことにより、現在の親以外の依存対象の形成における《良いイメージ》を矢印でつないだ。

親以外の依存対象の形成 【親以外の依存対象の形成】はOPPである。【親以外の依存対象の形

成】について、出会いのきっかけは同じ学科がほとんどであり、授業などで一緒にいる機会が増え、仲良くなるパターンが主であった。一緒に過ごしていく中で、“どんなことでも肯定してくれる”、“ありのままを受け入れてくれる”など、相手に《信頼感》や《安心感》を抱くようになり、悩み事を相談したりと“自己開示ができる”ようになっていく。そういった《良いイメージ》を抱く一方で、仲良くなればなるほど、“自分のこういう部分を見せたら離れていくんじゃないか”などの＜見捨てられ不安＞や、“自分のありのままを見せると、嫌われてしまうかも”と＜嫌われることへの不安＞、また深い仲になったゆえの相手を＜傷つけることへの恐れ＞といった《悪いイメージ》を抱く。これらは、親密な相手との関わりの中で、行ったり来たりを繰り返しているため、黒矢印で循環を示した。

境界例心性の特徴を有する 【境界例心性の特徴を有する】はEFPである。＜安心感＞や＜信頼感＞を抱くなど《良いイメージ》を持っている一方で、＜見捨てられ不安＞や自己開示をすることによる＜嫌われることへの不安＞など《悪いイメージ》を持っている。それらのイメージは、親以外の依存対象との関わりの中で変わりうるため＜不安定なイメージ＞である。

境界例心性の特徴を有しない 【境界例心性の特徴を有しない】はP-EFPである。まず、【他者評価懸念】を抱くきっかけとなる【対人関係上の出来事】がないことが予想される。あるいは、【対人関係上のストレスフルな出来事】を経験したとしても、本人の特性が影響し、そのネガティブ経験を肯定的に受け止めるなどのプロセスを経て、親からの物理的・心理的自立に伴って、親以外の依存対象を見つけるが、児童期に【他者評価懸念】を抱くに至るネガティブな経験がないことから、＜安心感＞、＜信頼感＞に加えて、＜どんな自分も受け入れてくれる＞といった《良いイメージ》を抱く。親以外の依存対象との関わりの中で、ネガティブな経験をしたとしても、基盤が《良いイメージ》のため、イメージが分裂することはなく、＜安定したイメージ＞を持っている。また、自己像が安定していることが考えられ、依存対象に対しても＜1人の人間として捉える＞ことができている。

考察

分析の結果から、比較的安定した母子関係のもとで育った青年は、就学後の家族、特に母親との関わりや友人との関わりによって、他者評価懸念を抱く。友人との関わりは、トラブルやいじめなどネガティブなライフイベントになりうる出来事がほとんどであったが、家族との関わりはネガティブな出来事だけでなく、母親との日常的な関わりで生じる可能性が示唆された。これは、面接対象者の敏感さなどの特性も影響していることが考えられる。また、親以外の依存対象の形成において、ほとんどの対象者が大学で知り合った友人をあげていた。このことから、「第二の分離-個体化期」に伴って、これまで学校生活での対人関係が希薄で、友人関係を重視してこなかった者が、親以外の親密感を抱くことのできる依存対象を見つける作業を行っていることが考えられる。その際に、これまでの対人関係の中で生じた他者評価懸念が顕著になり、境界例的な特徴を提示しているのではないかと考えられる。

本研究の対象者は、母親とある程度安定した愛着を築いてきており、彼らにとって親は無条件で受け入れてくれる存在であり、見捨てられる不安を抱く必要がない。そのため、比較的親からの評

価値を気にしなくてもよい場に守られて育ってきたことがうかがえる。よって、親から心理的に自立するために、新たな依存対象を見つける際に、どのくらい自分をさらけ出したら嫌われないか、受け入れてもらえるかといった、見捨てられ不安や自己開示による不安を感じ、それらが境界例心性の様相を表していると考えられる。

総合考察

本研究の全体考察

研究Iから、内的対象像によって、境界例心性の状態像が異なることが示された。良い内的対象が内在化している者でも、嫌われることに対する不安や人とのつながり欲求を持っており、これらは青年期心性として理解することができると考えられる。一方で、悪い内的対象像や持続しない内的対象像を持っている者は、人とのつながり欲求はあるが、嫌われることに対する不安、見捨てられ不安を抱き、それらの不安が影響し、自ら関係を断ち、孤立感を抱くといった特徴を持っており、それらの特徴が合わさることで、境界例心性を理解することができると考えられる。以上のことから、嫌われることに対する不安や人とのつながり欲求は、一般青年も持ちうる特性であるが、そこに自ら関係を断つ、漠然とした孤立感を感じるといった特性が加わると、対人関係が不安定で、より境界例的な心的状態を表すことが示唆された。

また、研究IIIでは、安定的な母子関係の下で育った青年が、どのような対人関係を経て、現在境界例心性の特徴を有するに至るまでのプロセスを提示した。井梅 (2011) は、幼児期の母子関係はそのまま現在の対象関係に影響を及ぼすわけではなく、その後の関係性において絶えず修正されながら形づくられていくと述べているが、本研究では、その後の関係性がどのように変容し、内的対象像に影響を及ぼすか、また現在の境界例心性の高さに影響を及ぼすかを示唆した。具体的には、就学後の家族や友人との関わりにおいて他者評価懸念を抱くことがきっかけであると考えられる。他者評価懸念を抱くことによって、その後の対人関係のあり方に影響が及ぼされる。さらに、青年期における心理的自立に伴って、親以外の依存対象の形成を行う際に、他者評価懸念が顕著になり、境界例心性の特徴を有することが考えられる。

これまでの研究から、境界例を理解するために、幼児期の母子関係が重要とされてきた。本研究では、幼児期の母子関係だけでなく、その後の対人関係の影響も注目する必要があることを提示した。

本研究の限界と今後の展望

本研究の限界としては、研究II、研究IIIにおけるサンプル数の少なさが考えられる。よって、今後の展望としては、より多くの対象者で境界例心性の高さに関連する要因を検討する必要があると考えられる。また、本研究では、対人関係における境界例心性を取り扱っているため、衝動性や空虚感など他の境界例心性の特徴については検討されていない。よって、今後の展望として、境界例心性の特徴を包括して検討を行うことで、さらなる境界例心性の理解に努めたい。

引用文献

- 安立奈歩 (1999). 青年期の境界例心性に関する研究 心理臨床学研究, 17 (4), 354-365.
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC : American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕 (監訳) 染谷俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村 将・村井俊哉 (訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 馬場禮子 (2002). 改訂・境界例 ロールシャッハテストと心理療法 岩崎学術出版社
- 馬場史津 (2005). 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房
- Blos, P. (1967). Second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 169-186.
- 江上奈美子 (2010). 大学生の境界例心性と親子間の家族機能認知の差異 心理臨床学研究, 28 (5), 654-664.
- 江上奈美子 (2011). 大学生における境界例心性がライフイベントおよび不快・快感情に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 20 (1), 21-31.
- 江上奈美子 (2013). 非臨床群の境界例心性に関する研究の概観 九州大学心理学研究, 14, 71-78.
- 古川奈美子・北山 修 (2004). 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について 九州大学心理学研究, 5, 207-218.
- Gillespie, J. (1994). *The projective use of mother-and-child drawings*. New York : Brunner/Mazel. (松下恵美子・石川 元 (訳) (2001). 母子画の臨床応用—対象関係論と自己心理学— 金剛出版)
- 東山弘子 (1998). 学生相談にみる境界例 河合隼雄・成田善弘編 こころの科学, 36, 50-56.
- 井梅由美子 (2011). 青年期女子の母娘関係と対象関係 東京未来大学研究紀要, 4, 27-35.
- 北村琴美・無藤 隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係 : 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12 (1), 46-57.
- 松野航大・野末武義 (2015). 大学生における家族コミュニケーションおよび両親の夫婦関係の認知と境界例心性の関連性 家族心理学研究, 29 (2), 114-127.
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A. (高橋雅士・織田正美・浜畑 紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化— 黎明書房)
- Masterson, J. F. (成田善弘・笠原 嘉 (訳)) (1979). 青年期境界例の治療 金剛出版
- 中西佳恵 (2010). 青年期の親密な二者関係における境界例的な心性について 心理臨床学研究, 27 (6), 653-663.
- 成田善弘 (1987). 青年期境界例 精神科治療学, 2 (3), 319-326.
- 大家聡樹 (2006). 青年期の親子関係イメージと境界例心性に関する研究 心理臨床学研究, 24 (1), 22-33.
- 斎藤久美子 (1990). 青年における「境界」心性の位相 金剛出版
- 斎藤久美子 (1993). セルフレギュレーションの発達と母子関係 精神分析研究, 31 (5), 261-273.

- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9 (2), 59-70.
- 重松晴美 (2005). 青年期における孤独感および内的対象の想起に関する研究—境界例心性を通して— 心理臨床学研究, 22 (6), 659-664.
- 田村和子・井上果子 (2005). 青年期における境界例心性と養育態度の関連について—こころの健康, 20 (2), 73-87.
- 安田裕子・サトウタツヤ (2012). TEM でわかる人生の経路—質的研究の新展開— 誠信書房